

	<h1>ふくりゅう</h1>	特定非営利活動法人 日本下水文化研究会会報
		発行責任者 酒井彰(運営委員会代表)
		平成 29 年 7 月 18 日 通巻 90 号

## ふくりゅう 90 号 主な目次

平成 29 年度日本下水文化研究会 総会報告	1
第 14 回下水文化研究発表会のお知らせ	2
平成 28 年度学会出版文化賞・著作賞受賞のお知らせ	3
土木学会出版文化賞 稲場紀久雄著「バルトン先生 明治の日本を駆ける！」(平凡社)	
廃棄物資源循環学会著作賞 山崎達雄著「ごみとトイレの近代誌」(彩流社)	
2017 バルトン忌のお知らせ	4
第 68 回定例研究会	
「Bangladesh 農村域における飲料水の問題」に参加して	大野 雪子 4
Bangladesh 便り No.38 ラマダン	高橋 邦夫 6
運営委員会から／編集後記	8

※タイトルをクリックするとその記事にジャンプします／ページ番号をクリックすると目次に戻ります。

## 平成 29 年度 日本下水文化研究会 総会報告

7 月 1 日（土）、平成 29 年度日本下水文化研究会総会が行われました。

出席者は 21 名でしたが、委任状 46 名を含め、定数（正会員の 1/3）を満たしていることを確認。照井仁氏を議長に選出しました。

書記ならびに議事録署名人を選出し、議長の議事進行のもと、次の 5 つの議案について、運営委員会代表から説明があり、審議が行われました。

- 第 1 号議案 平成 28 年度事業報告の承認ならびに会員の現況報告に関する件
- 第 2 号議案 平成 28 年度収入支出状況報告及び会計監査の承認に関する件
- 第 3 号議案 財産目録の承認に関する件
- 第 4 号議案 役員の変更に関する件
- 第 5 号議案 平成 29 年度事業計画及び予算に関する件

いずれの議案も拍手をもって承認されましたが、第 2 号議案で、佐藤会員から前年度繰越金と前期正味財産との相違について質問があり、この差は未収会費である旨回答されました。また、平成 29 年度事業計画で提案された「文化研改革検討委員会」、「流域水循環文化研究会」について、質問がありました。

前者については、地田会員から、「会員の意見を聴取し、運営委員会で方向付けし、評議員会に諮るというのが筋ではないか、外部の意見も聞くというのはなぜか」という質問があり、「やるべき活動や実施が考えられる活動と、現執行体制のキャパシティのギャップが生じる可能性が高く、外部の意見も参考にしたいと考えている。いずれにしろ、委員会の人選・体制は今後詰めていく」との回答がありました。後者については、椿本会員から「具体的な連携策はこれから考えるのであろうが、どのような団体との連携を考えているのか」という質問があり、「水環境に係る NPO がイメージされるが、具体化は委員会で決めていかれるものと考えている」と回答されました。

総会に先立ち、第 1 号議案・事業報告の説明を兼ねて、分科会および支部活動報告が行われました。屎尿・下水研究会報告は地田会員、海外技術協力分科会報告は高橋運営委員及び酒井代表、関西支部報告は藤田運営委員からそれぞれ報告されました。

総会終了後、平成 28 年度土木学会出版文化賞を受賞された稲場評議員から、本会会員に向けた挨拶があり（p.3 からの記事参照）、その後、総会のなかで

質問のあった平成 29 年度事業計画に関して、次のように見解が述べられました。

「広く会員から意見を聞くことは欠かせないと考えているが、文化研改革検討委員会では、今後の事業内容ばかりでなく、解散、分散、他団体との合併などあらゆる可能性を検討することになり、その動静は、関係団体にも影響を与えるものと考えられます。した

がって、運営委員会、評議員会だけでは決められない要素があり、事業提案内容は妥当であると考えており、たとえ、解散するにしても、ネットワークの形成を図ること等により新たな活動への素地を作り、将来に引継ぐ道を何も残さないということは避けなければならないと考えています」

(文責：酒井彰)

## 第 14 回「下水文化研究発表会」ならびに発表論文募集のお知らせ

第 14 回下水文化研究発表会を東京で開催いたします。前々回より、以下の分野での優秀論文に対しまして、「久保起下水文化賞」、「バルトン記念賞」を表彰することにしておりますので、たくさんの応募をお待ちしております。

- 久保起下水文化賞：水と環境を守る政策論、そのための事業経営論、活性化論等に関するもの
- バルトン記念賞：海外援助政策、同実践論等に関するもの

両賞への応募以外にもこれまでの募集分野である「水文化史」、「水文化活動」、「水文化研究」、「海外水文化」をテーマとする論文も募集いたします。研究発表会名称は「下水文化研究発表会」ですが、募集分野名称からもお分かりと思いますが、下水あるは下水道という分野にとらわれておりません。応募論文は、研究発表会講演論文集に掲載いたします。

- ① 「水文化史」：水文化（し尿、トイレ、ごみ、排水、水の使い方、活かし方）の歴史など
  - ② 「水文化活動」：水文化の普及活動、流域の上下流交流、水関連事業における住民参加など
  - ③ 「水文化研究」：水環境・水資源・水循環に係る調査など
  - ④ 「海外水文化」：これまでの海外技術協力の経験、途上国に適した技術、海外の水文化・水事情など
- ※ 記載のキーワードはあくまで例ですから、これにとらわれずに応募ください。

### 開催要領・プログラム

日時：11 月 18 日（土）10：00－16：30

（時間は予定、後述のシンポジウムを含む）

会場：新宿区 NPO 協働推進センター

（東京都新宿区高田馬場 4-36-12）

※高田馬場駅下車徒歩 15 分

（山手線・東京メトロ東西線・西武新宿線）

※バス：小滝橋下車徒歩 4 分

（都営バス：飯 64・上 69、関東バス：宿 02・宿 08）

TEL：03-5386-1315

### 発表論文募集

下記日程で論文を募集します。同封の応募要領にしたがい、応募用紙に必要事項をご記入のうえ、ふるって応募ください。応募要領、応募用紙は、ホームページからもダウンロードできます。

- 応募申込締切：8 月 25 日（金）必着
- 論文原稿締切：10 月 2 日（月）必着
- 発表時間は 1 件 30 分を確保できるようにします。
- 分野ごとに発表会場を設け、分科会とするものではありません。参加者ができるだけ多くの発表を聴けるように発表プログラムを配慮します。
- これまでと同様、誌上（下水文化研究発表会講演論文集）発表を受け付けております。当日、東京で開催される研究発表会への参加・発表の難しい方もふるって応募願います。久保起下水文化賞・バルトン記念賞対象論文を投稿される方は発表していただくことを原則とします。
- 応募申込みをされた方には、論文執筆要領をお送りいたしますが、こちらもホームページからダウンロードできます。

### 特別企画：

**シンポジウム “サステナブルな援助とは” —途上国における安全な水の確保、衛生問題を通して—**  
**テーマ：バングラデシュにおける安全な水の確保、衛生問題に関する諸活動を通して、サステナブルな援助とは何か？そしてその筋道は？サバイバルからサステナブルへ？**について議論する予定です。

**パネラー予定者と提供話題：川原一之氏（アジア砒素ネットワーク）、村瀬誠氏（榊天水研究所）、本会高橋邦夫、酒井彰がそれぞれ、砒素対策、天水（雨水）利用、エコサントイレの普及活動、都市域スラムの衛生改善について基調講演し、その後、パネル・ディスカッションを行う。**

## 平成 28 年度学会出版文化賞・著作賞受賞のお知らせ

このたび、平成 28 年度刊行された本会会員による著作が学会の出版文化賞・著作賞に選定されました。なお、廃棄物資源循環学会の前年度著作賞は、元本会運営委員 稲村光郎氏が「ごみと日本人」（ミネルヴァ書房）で受賞されています。

**土木学会出版文化賞：稲場紀久雄著「バルトン先生 明治の日本を駆ける！」（平凡社）**

**廃棄物資源循環学会著作賞：山崎達雄著「ごみとトイレの近代誌」（彩流社）**

稲場氏は、本年度総会において、次のように受賞の挨拶をされました。

「WKバルトンについての研究を始めたのは1976年、それ以降、転職により、今は下水道界を離れながらも40年にわたって、バルトンをフォローし研究調査を続けることができたのは、バルトン忌を継続して開催してきた下水文化研究会の存在があったからであると言えます。また、本書の刊行にあたり、出版記念会を催していただいたことについても感謝の気持ちでいっぱいです。受賞理由には、この著書が、衛生工学がいかに社会に貢献するものであるかを叙述し、土木工学の社会の評価をおおいに高めることが期待されるとあります。広い分野をカバーする土木学会にあって、下水道に関わる著作が受賞したのは初めてのようです」

山崎氏からは、受賞のことばを送っていただきました。

「この度、『ごみとトイレの近代誌』が、廃棄物資源循環学会の平成 28 年度の「著作賞」を受賞させていただきました。私は、長年ごみとトイレに関する史料を収集してきました。その中には、京都市、大阪市や東京市等の大正・昭和初期の塵芥焼却施設、明治の奇人宮武外骨の滑稽新聞が作成した「女学校便所」や「三番叟」、更には活動弁士の石野馬城の子供の立小便姿を

描いた「此處小便無用」などの佳品の絵葉書があります。また、現在の「軽犯罪法」のルーツにあたる「違式註違条例」をわかりやすく絵解きした「御布令之訳」、更に、日本で作られた神戸の島村商会の

トイレットペーパーの実物などの珍品もあります。『ごみとトイレの近代誌』は、これらの史料に加えて、現在の浄化槽のルーツにあたる水槽便所の新聞広告などを使って、ごみとトイレの近代の歩みを読み解いたものです。日本下水文化研究会研究発表会における報告、尿尿・下水研究会が編集されていますトイレヨモヤマバナシ（「都市と廃棄物」連載）での発表などを、1冊の本としてまとめたものです。

『週刊金曜日』や『新潮 45』の書評、毎日新聞や業界誌などでも紹介され、神戸新聞による島村商会のトイレットペーパーの紹介記事が、Yahoo ニュースにも載りましたので、御存じの方もおられるかもしれません。

今回の「著作賞」の受賞は、絵葉書と新聞広告などから、ごみとトイレの近代史に光をあてたユニークな視点と、長年の史料収集と研究が評価されたと思い、本当に嬉しく思っております。

最初に発表の場を提供して頂きました日本下水文化研究会の皆さまには感謝しており、とりわけ、トイレヨモヤマバナシへの掲載にあたっては、尿尿・下水研究会幹事の地田修一さんには、



廃棄物資源循環学会著作賞の表彰状



土木学会出版文化賞の表彰状ならびに記念の盾

大変お世話になりました。尿尿の処理やトイレに関するネタは、まだまだ尽きません。これからも、新しい発見を求めて、各地の資料館等を訪ねて、調査・研究をもう少し続けてみたいと考えております。今後とも、皆さま方のご支援・ご指導をお願いします」

お二人とも、本会の寄与があったことをご挨拶な

らびに受賞のことばで述べられており、たいへん光栄に思いますとともに、このように社会から認められた著作に関わられたことを誇りに感じます。最後に、優れた著作の刊行にいたるご努力に対し、改めて心から敬意を表したいと思います。

(文責：酒井彰)

土木学会ホームページに出版文化賞の受賞理由が掲載されています。[http://committees.jsce.or.jp/pub\\_prize/](http://committees.jsce.or.jp/pub_prize/)  
「ごみとトイレの近代誌」については、地田修一会員による紹介記事がふくりゅう 88 号に掲載されています。

## 2017年 W. K. バルトン忌のご案内

恒例のバルトン忌墓参を下記日程で行います。今年は、バルトンの命日に行います。今年度総会において、新たな分科会として承認されました「バルトン研究会」の主催で行います。バルトン研究会では、今年が、来日 130 周年にあたりますので、記念行事も企画されており、当日は企画内容も明らかになるかと思えます。

参加は自由です。事前のお申し込みなどありません。猛暑の季節、屋外での催しとなりますので、熱中症対策、虫除け対策は各自でお願いしたいと思います。

### 記

主 催：NPO 法人 日本下水文化研究会  
バルトン研究会

日 時：2017年8月5日(土)

墓参：午前10時30分(集合)～11時30分

集合場所：青山霊園入り口 島村花店  
港区南青山2-34-31(案内図参照)

※ バルトン墓碑へは島村花店からご案内いたします。  
なお、交通事情等により間に合わなかった場合は墓碑へ直接おいで下さい。

※ お問い合わせは [jade@jca.apc.org](mailto:jade@jca.apc.org) まで

※ 担当者携帯電話：09074166354, 08046301559

### <墓参集合場所案内図>



住所：〒107-0062 東京都港区南青山2丁目34-31  
東京メトロ 千代田線乃木坂駅 徒歩5分、  
銀座線外苑前駅 徒歩10分

## 第68回定例研究会

### 「バングラデシュ農村域における飲料水の問題」に参加して

#### 水道技術経営パートナーズ 大野 雪子

4月17日、東京大学大学院 新領域創成科学研究科 国際協力学専攻准教授の坂本麻衣子氏から標題の講演をいただいた。坂本氏は京都大学地球工学科を卒業、学位取得した後に、東北大学、長崎大学を経て現職についている。前年度にはフルブライト奨学金を受けてハーバード公衆衛生大学院にて、ラオスでダム建設に伴う先住民移転と、その後の移転者の適応プロセスとプロジェクト評価を包括的に行う手法を

勉強され帰国したばかりのところの定例研究会での講演となった。

今回のテーマであるバングラデシュとの関わりは、京都大学の時にヒ素汚染の研究をしていた学生さんの論文執筆をお手伝いしたことからは始まり、長崎大学の際にもバングラデシュやインドの水と衛生を研究テーマの一つにするに至った。そういった経緯もあり、ヒ素汚染の状況は類似している一方、文化民族



の違いによって水源利用行動にどういった違いがあるのかを比較しており、研究の結果を講演いただいた。

まず、バングラデシュではもともと表流水を水源として利用しており、糞便性の感染症が蔓延していたために、水源を地下水に切替え、更に20年ほど前から地下水のヒ素汚染が知られるようになった経緯がある。集落の中にある井戸は政府がヒ素汚染の有無によって赤・緑に色分けしており、ヒ素によって汚染されている赤い井戸の水を飲み続けると皮膚がん、内臓の疾患など健康被害があることも利用者には浸透している。しかし、バングラデシュでは水汲みは女性の仕事であり、赤い井戸を使う健康被害に関する知識があっても、イスラム教の影響で女性は男性の目を避けたり、モスクを避ける導線を選択するために赤い井戸を使い続ける住民もいる。同じようにヒ素汚染があるインドの集落での水汲みの際の導線の選択と比較して、文化や宗教が行動に与える影響を考察し、行動パターンの法則を見出すことでより多くの人に利用されやすい水源（簡易なヒ素除去装置を含む）の位置を割り出すことを目的としてこのような研究を行った。

水汲み労働は重労働である。水運びに使われるコルシ（壺）の大きさにより、7~8リットル程度から15・20リットル程度入るものもあり、慣れていない人は成人男性でもよろける程の重さとなるとお聞きした。

### Capabilityと肉体的・精神的ストレスの定量化

Capabilityとはアマルティア・センが提唱した概念で、「できること」の集合体のことを指す。これを定量化する作業を研究の中で行っている。具体的には、生活の安定感（収入の多少）や健康状態（水汲みに必要な体力）、ヒ素の健康被害に対する知識や不安感からくる水源を変更することへの意欲の大小などをアンケート結果から推計した。このCapabilityと水運びの肉体的・精神的ストレス（水源の距離が遠かったり、足場が悪い場所であれば肉体的ストレスがあり、人目が多かったり、モスクの近くに水源があれば精神的ストレスにつながる）を定量的に評価した。16の集落で村の精神ストレスの最大値と赤井戸利用世帯数を計算し、ストレスが大きく、赤井戸利用世帯が多い集落から5グループに分類した。

この結果を用いて、ヒ素除去装置や雨水タンクをできるだけ効率的に設置しようと考え、1、2番目にストレスが多いグループ（計5集落）に何らかの

投入をすれば、現状で赤井戸を利用している47世帯を11世帯に減らすことができるという結論となった。

### Space-Syntax論の適用

Space-Syntax論とは地図上にメッシュを作成して、メッシュ毎の視認性を解析する手法で、村の空間でいえば、どのくらいステップを踏まないといけない場所なのかということの数値的に表すもの。視界に入りやすい場所と入りにくい場所が色分けできる。

ここで、インドとの比較がでてくるが、インドではヒ素汚染についてあまり知られていない一方、政府が建設した深井戸と個人建設の浅井戸というものはよく認識されており、深井戸が安全だと信じられている。こういった条件の違いの中で、世帯の属性、経済状況や教育レベル等の何が影響してくるのか、バングラデシュ、インドで別々に解析した。

その結果、インドでは現在の飲み水が安全だと思っていて、より視認性の高いルートで安全な水源まで行けるほど人は安全な水源を選択しているという結果となった。また、月あたりの肉の消費量が多い、つまり裕福であるほど安全な水源の利用ができるという結果もあった。負の影響としては、浅井戸のヒ素汚染の可能性を知っている方が安全な水を選択しないという逆説的な結果も出ている。ただし、ヒ素汚染のことをあまり知らない人たちであるため、アンケートの質問をどの程度理解してくれたのかは疑問が残っている。このことから、短いルートで行けて、見通しの良いルート出行ける場所に代替水源を導入するとインドでは使ってもらえそうだという結論となった。

一方、バングラデシュでは、人目につきやすい所にある水源ほど使ってもらえなくなるという結果となった。外部者が開発援助という形で施設を作る際に、できるだけ目立つ所に作ろうとするのが一般的だと



定例研究会の様子（於 JICA 地球ひろば）

思うが、インドではいいかもしれないが、バングラデシュでは使われなくなる可能性が高くなるという研究結果である。

#### 参加型モニタリングによる井戸水の塩分濃度調査

バングラデシュは沿岸部であり、南部地域は気候変動のフロントラインだと世銀のレポートで表現されている。気候変動による地下水の塩分濃度が危惧されている。数本の保健分野の論文を参照したところ、被験者の尿中塩分濃度の分析で、尿の分析は細くなされているものの、水源の井戸の分類が非常に大雑把なものであるため、井戸ごとの塩分濃度を定期的に測定できる方法を検討した。塩分濃度はそれほど精密に測定する必要はないため、日本で売られている簡易塩分チェッカーを購入し、10人の現地女性に毎週金曜日に10サンプル、1年間の調査をお願いした。測定結果はダッカの協力者に電話報告してもらい、ダッカの協力者がデータを表入力、現地女性にモバイルバンキングで謝金を支払う形で調査を行った。

100本の井戸のデータを塩分濃度が高くなると思われる乾季のデータを利用して6つのクラスに分類した。塩分濃度と環境条件の関連を見ると、他の研究では丘、平地、沿岸部等の分類をしていたが、統計的には井戸の深さの方が、関連がありそうだという結果となった。WHOの文献に塩分0.5g/L以上になると味に影響が出るということが書いてあり、調査期間中にこの値を超えた井戸が約3分の1あったものの、一番濃度が高い時期を超える程度であった。家庭での食事の塩分摂取も調査したところ、食事からの塩分摂取の方が飲料水からよりも圧倒的に多く、

現状では気候変動による井戸水の塩分濃度上昇は大きな健康被害には繋がっていないということが出来る。

本調査を参加型という形で行ったのは、一番現実的にデータを取れると考えたからではあったが、モニター的女性達が重要な仕事だと捉えて継続してくれ、コミュニティの人と話すきっかけともなり、お互いに教えあうなどして真剣に取り組んでいた姿が印象的だった。最後の報告の時に見せてもらった結果を記したノートも、取りまとめの女性がしっかりチェックしていたり、そういう姿勢を見ることができたことから調査をやって有意義だったと感じた。

#### 感想

今回の定例研究会には会社の方からの紹介で初めて参加した。コミュニティに作る施設がどれくらい利用されるのか、ということは様々な要素が関係してくると思うが、それをできるだけ数値化、定量化しようという試みが印象的だった。コミュニティレベルで何か施設を作る際に、ターゲットを絞り込む一つの判断材料になると感じた。紹介されていた以外の手法もあるようだったので、今後類似の仕事をする時には勉強してみたいと思った。

また、個人的には20年ほど前に初めて渡航した途上国がバングラデシュだったこともあり、ヒ素汚染や気候変動の影響など、現状を知る良い機会となった。更に個人的に、以前、坂本先生の講座で研究を行いたいと考えて、メールでやりとりをさせていただき、今回初めて直接お話をする機会となり、先生の研究に対する姿勢や基本理念を伺ったことも興味深かった。

## バングラデシュ便り No.38

### ラマダン

本会運営委員 高橋 邦夫

2015年のラマダンは6月19日から7月18日までであった。この国に滞在中、奇しくもすべからくラマダンに該当した初めての体験であった。確か2004年の11月に体験したのが初めてであり、その後11年後にはかくなる月日に移動したのである。ちなみに月の運行に依存するラマダンは、通常年当たり太陽暦に対して10-12日の先送りとなる。特にこの時期のラマダンは夏至を挟んだものとなり、住民には最も対処しづらい時期に当たるといふ。何故なら日没から夜明けまでの時間が最短となるからである。

ラマダンはモスリムの年中行事の重要かつ神聖なイベントであり、教徒は忠実に従う。日没から夜明け以外には飲食を須らく禁じるものである。中には唾を飲み込むことも法度と聞いた。そもそもの起源は富者・貧者ともに身をもって同等の飢餓状態を体験し、一方で食物に対する感謝の念、さらには同朋意識を共有するという意図を持つらしい。ただし、幼児や老人など弱者は例外とされ、また健常者であっても長期の旅行者に限っては他日に埋め合わせることで法度は適用外となるらしい。この年、パキスタンでは

この期間、連日 40℃を超える異常な熱波に襲われ 1500 人を超える死者を出した。パキスタンはこの国のモスリムから見て、更に原理に厳格なモスリムという認識があり、飲み物の補給などの融通措置でその多くが救われたことであろう。

ラマダン期間中の日没から夜明けまでの彼らの行動は概ね次のようである。まず日没とともに Iftar という軽食を摂る。また日没はその日 4 回目の AZAN (モスクへの礼拝の呼びかけ) の発声と同時に Iftar の内容はほぼ同様の品目から構成されているようである。豆の煮もの、砂糖菓子、ナツメヤシの砂糖漬け、揚げ物、炒り飯、キュウリなどの野菜、そして飲み物が定番のようであり、それらはそこかしこの露店でも入手可能である。Iftar 時刻の十分前には、とあるレストランでは上述した食物を盛り付けた皿が並べられ、その廻りは多くのモスリムの民が取り囲んでいる姿を連想してほしい。彼らは AZAN を聞くやそれこそ一斉に飲みかつ食らいつくのである。まず飲み物を一気に飲み干す姿が印象的である。そそくさと Iftar を済ませた彼らは近隣のモスクへと移動する。またラマダン期間中の JAMAAT (お祈り) 時間は特別であり一時間にも及ぶとのことである。

その後、その日最後の 5 回目の AZAN の後 JAMAAT を済ませ自宅へと移動する。その後の彼らの暮らしぶりは様々であろうが、聞いた話を集約すると、しばし家族で団欒した後就寝し、午前 3 時前後に正餐を摂るという。どのくらい食するのかは分からないが夜明けからの行動に対する準備は怠らないのであろう。そしてまもなく夜明け前約 1 時間半にはその日最初の AZAN と JAMAAT が控えているのである。

多分消化不良、睡眠不足の状況で、その日の仕事は始まるのであろう。役所や学校などの始業時間は変わらない。ただし終業時間は早まる。Iftar の準備などのためである。通常 5 時終業の役所では 4 時終業という言い方をしていたが事実はそのよりもはるかに早いであろう。何故なら通勤時の交通マヒがすでに午後 2-3 時には始まっているからである。この期間、BARD では通常行われている研修は無い。職員は各自の抱える諸事に勤しむとのことである。BARD に滞在中、彼らオフィス・ビルを覗いてみたが、ほとんど人の気配はなかった。多分自宅などで鳳眠を貪っているのであろう。

ラマダン中、他国人が戸惑うのは食事の処置である。ダッカのような国際都市の中級以上のホテ

ルでは左程の問題は無いにせよ、地方の場合には大きな困難が伴うことになる。ジェソールは地方の中核都市であり、いつも利用するホテルはインターナショナルを冠とするそこそこのホテルである。問題はレストランにある。朝食は通常 8 時前後に利用していたが、この期間毎朝レストランのドアは閉鎖されていた。ホテルのフロントに掛け合うと約半時間後に朝食は用意された。そして利用客は数名程度であった。翌朝、昨日の体験が学習されているだろうとレストランに向かうとやはりドアは閉鎖されている。約一週間ホテルに滞在したが毎日この繰り返しが続いた。ジェソールよりはるかに地方にある BARD はそれこそ十年以上滞在し、勝手知った組織であり、そのカフェテリアのカレーは絶品であることは何度も記した。カフェテリアのスタッフの幾人かとは旧知の間柄となっていた。BARD に到着後、担当職員からラマダン中のカフェテリアの利用方法を教えてもらった。朝・昼・晩と時間を定められそれに従うことは必定である。ところがカフェテリアのドアが閉まっていたことが何回か有った。あきらめてホステルへ戻る途中、勝手知ったるスタッフに出会い食することが出来たこともある。要するにこの時期、厨房係員のやり繰りに苦慮している気配が十分にあり、まして異教徒に対する忌避感も当然あるのであろう。

ラマダン総体としては食糧摂取量は減るはずである。しかし一方で食糧価格は上昇するという報告が多い。ダッカではこの期間中、例年通常価格の倍になるのが普通であるという。そしてラマダン開けには、それこそ“精進落とし”とも言うべき EID 祭り (EID-EL-FITR) が控えて居る。概ね 1000 万人といわれるダッカの居住者の民族大移動が始まり、ダッカの人口は半減するのである。



EID-EL-FITR で地方の出身地へ帰省するダッカ市民  
(18 July 2015, The Daily Star)

### 運営委員会から

- 総会で承認された新しい運営委員会の構成メンバーのもと、活動を継続して参りますのでよろしくお願い申し上げます。なお、総会后、互選会を開き運営委員会代表に酒井彰運営委員の再任を決めました。
- 本年は隔年開催の研究発表会開催年です。久保起下水文化賞、バルトン記念賞への応募を含め、低調だった前回の状況を挽回すべく、積極的な応募ならびに参加を求めます。併せて、本会が海外技術協力分科会の活動として実施してきたこれまでの活動を踏まえた、国際協力に関するシンポジウムを企画しておりますので、こちらにもご参集いただきたいと思ひます。
- 本年度事業計画では、いくつかの新たな委員会の設置が提案されています。とくに、「下水文化研究会改革検討委員会」は、本会の今後の動静を左右するものですから、会報を通じて動向をお伝えしていくとともに、皆さまからのご意見もお聴きしていきたいと考えておりますのでよろしくお願いいたします。
- 総会で承認された「尿尿・下水研究会」の事業計画にも書かれていますが、本年度は、小平市ふれあい下水道館の設備改修工事のため、「例会」、「特別講話会への講師派遣」などの活動は休止します。
- 機関誌編集作業も進めています。9 月にはお届けできるものと思ひます。

### 編集後記

事務所を退去してから、1 年経過し、スリムな運営のもと、会報・機関紙の発送、運営委員会開催もやりくりし、新年度の総会を含め、従来からの活動を維持することができました▶ただし、主な活動の担い手は分科会・支部となってきたことは否めません。さらに、本年度は、新たな分科会として「バルトン研究会」も発足します▶運営委員会

は、事務局の役割に追われている実情がありますが、それは本来の役割の一部です。研究発表会という本部主催の行事も行われる本年度、今一度、運営委員会が担うべき責任・機能を考えてみる必要があります。

(酒井 彰)

特定非営利活動法人 日本下水文化研究会  
〒162-0823 新宿区神楽河岸 1-1  
東京都ボランティア・市民活動センターメールボックス No.78  
e-mail: jade@jca.apc.org  
URL: <http://www.jca.apc.org/jade/index.htm>  
URL(ブログ): <http://blog.goo.ne.jp/jadetokyo>